

# 家事・育児と研究に運はつきもの!?



## 小木曾真樹

(独)産業技術総合研究所  
主任研究員, 博士 (工学),  
名古屋大学大学院理学研究科化学専攻修士課程  
修了,  
専門は自己集合化学.  
E-mail: m-kogiso@aist.go.jp

年次大会の会場で旧知の方から男女共同参画について原稿執筆の依頼を受けた。普段、自分の職業を人に言う場合、「兼業主夫」と冗談(半分?)で言い、実際に家事・育児の半分以上を当たり前のようになっている私としては、「とうとう回ってきたか」と思った反面、いざ「仕事と両立するコツは?」と聞かれても、「運」としか答えようがなかった。それではまったく話にならないので、結婚して11年、第1子誕生から8年、第2子誕生から2年の道のりを改めて振り返ってみることにした。

私の妻は小学校の教員である。“モンスターペアレンツ”という言葉に代表される昨今のキツイ教員事情を聞いたことがある方も多くいると思いますが、身内にもたないと実際の大変さは想像できないと思う。“不適格教員”などと十把一絡げで白眼視する「他人に厳しい風潮」もある。もし学校のレベルが落ちているというのなら、それは社会全体のレベルが落ちているからであり、人ごとのように論じるのは誤りであろう。ここでは教育問題の論評はこれ以上避けるが、とにかく教員は無駄に忙しい。しかも精神的に疲れている。

研究者の世界は、極論すれば成果がすべてである。研究時間が長くなるほど良い成果を得る確率が高くなるのは間違いないが、成果と時間が比例する訳ではない。個人的には、長い時間研究することよりも、世界で誰もやっていないオリジナリティやユニークさにこだわることのほうが大事だと思っている。また、良い成果を引き当てるためには、最初に書いたように“運”も大きな要因になることに異論はないであろう。私は自他ともに認める「運の良い男」である。16年前に現在の産総研に入所以来、世界初となる成果をいくつも発表してきている。

ただ、振り返ってみると、「運」とはただ「面白い結果が転がり込む」運」ではない。「テーマの善し悪しの運」、「良い上司や同僚に恵まれる運」もある。前者

の運は先ほど書いた「オリジナリティ」「ユニーク」にこだわることで引き寄せた運でもある。そして、後者の運が私にとって大きかったことは、今回振り返ってみて改めてよくわかった。自他ともに認める「運の良い男」であるが、他人が思うように常に順風満帆だった訳ではない。先が見えずにもがき苦しんでいた時期も何度かある。そんなときに最初の上司だった清水敏美氏(ナノテクノロジー・材料・製造分野副研究統括、兼・ナノチューブ応用研究センター副センター長)、入所以来の先輩である増田光俊氏(同センター、バイオナノチューブチーム長)、現在の上司である浅川真澄氏(同センター、有機ナノチューブチーム長)には、自由に研究できる環境を整えていただいただけではなく、迷ったときには何度も道標を照らしていただいた。この場を借りて厚く感謝したいと思います。

話は少し飛びましたが、これらの“運”のおかげで、忙しい妻の分まで家事・育児を担う時間的に大きな融通性をもてたことが、仕事と家事・育児を両立できた最大の“コツ”であろう。家事・育児と言ってもやることはさまざまですが、体力・精神的に余裕がなければ、いつか必ず自分が破綻するし、親が切羽詰まった状況では子どもにも良い影響を与えない。また、保育所の送り迎えなど時間的にも縛られることがたくさんあります。体力・精神・時間とすべてに余裕をもっておく必要があります。そのためにはただ“運任せ”でもダメでしょう。自分でできることとして、ユニークな良いテーマを選び、方向性を明確にしてその方向に集中し、人より短い時間で面白い成果を出す要領をもつことも大事ではないでしょうか。そして繰り返しになります。良い上司に恵まれる“運”は必須。同時に、自分もそろそろ誰かの“上司”となる年頃。「運が良かった」と部下に思われるような上司にならないと……と思う今日この頃です。